

◎ シリーズ 長岡京歴史散歩

(126)

神足小学校区の遺跡2
— 弥生時代神足遺跡の墓地 —

JR長岡京駅周辺に広がる弥生時代の神足遺跡は、乙訓地域のみならず京都南部でも有数の大集落でした。これまでの調査によって、駅を挟んだ東西に堅穴住居たてあなじゆうきよで構成される2つの居住区域があり、それらを大きく取り囲むように大規模な墓地が存在することがあきらかとなっております。

神足遺跡の墓は方形周溝墓かたがけしゅうこうぼと呼ばれる平面が方形をしたもので、周囲に溝を掘り、真中に土を盛ってそこに遺体を納めていました。しかし盛土は後に削られ、発掘調査ではたいい周囲の溝が見つかるだけです。

今年の春にJR長岡京駅前で行った調査でも方形周溝墓が見つかりました。この溝の中からは横倒しになった2つの壺つぼが出土しました。どちらも口が大きく開く広口壺ひろくちと呼ばれるもので、表面には櫛くしのような道具を用いて模様が描かれています。一つは高さ40センチ。もう一つは高さ73センチもある大



▲壺の中に入れられたミニチュア壺



▲墓に供えられていた三つの大きさの壺

形のもので、これまで神足遺跡で見つかった壺の中では最大のものでした。壺の胴体には死者に供えたことを示す穴が開けられていて、状況から二つの壺はセットで供えられていたと考えられます。その後小さい方の壺の中の土を取り出していると、その中からさらに小さなミニチュアの壺が見つかりました。高さは7センチで、手のひらにのるサイズです。もちろん実用のものではなくお供え用に作られたものですが、おもしろいことに先の壺と同様の形をしています。

これらの様子から、どうやら同じ様な形の大・中・小の三つの大きさの壺が墓に供えられていたらしいということがわかりました。特にミニチュア品を壺の中に入れた例は、神足遺跡では初めての発見で非常に珍しいものです。具体的にどのようなに使われたかはわかりませんが、当時の葬式の様子を知るうえで貴重な発見となりました。